

文教常任委員会県内調査報告書

令和2年11月5日（木）に、「県立あおば支援学校」について調査を実施したところ、その概要は次のとおりでした。

神奈川県議会議長 嶋 村 ただし 殿

文教常任委員会 委員長 河 本 文 雄

# 文教常任委員会県内調査報告書

令和2年11月5日（木）

## 1 調査の概要

- (1) 調査箇所 県立あおば支援学校
- (2) 出席委員 河本委員長、石川(裕)副委員長  
大村、神倉、新堀、長田、須田、中村、作山、渡辺(ひ)、池田、  
北井の各委員
- (3) 調査日 令和2年11月5日(木)

## 2 県立あおば支援学校

### (1) 調査目的

県立あおば支援学校は、横浜北部地域及び周辺地域の特別支援学校の過大規模化に対応するため、旧県立中里学園跡地を活用して新設され、令和元年11月1日に条例設置、令和2年4月1日に開校した県立で29番目の特別支援学校である。

県教育委員会では、一人ひとりの教育的ニーズに応じた学校づくりを進めており、その中で、特別支援学校の教育環境の整備に取り組んでいる。また、令和2年3月には神奈川県の特特別支援教育のあり方に関する検討会最終まとめ(報告)が出されるなど、本県の特特別支援教育について様々な議論も行われている。

そこで、当校を調査することにより、本県の特特別支援教育に関する委員会審査の参考に資する。

### (2) 主な説明項目

本校の基本理念(コンセプト)は、「思いを紡ぐ 優しいあおば」とし、使命(ミッション)として「地域とともに歩み、地域に貢献する」及び「子どもたち一人ひとりの確かな学びを支える」を掲げている。県立あおば支援学校の教育は、地域に貢献する教育活動をベースに置きたいと考えている。そして、本校の児童・生徒に育みたい力として、「学びに向かう力・学びを生かす力」、「人や物とかかわる力」、「自分の心と体に向き合う力」を掲げ、これらを育むことで、生きる力を育成し、子供たち一人一人が自分らしく自己実現することを一つの軸としている。

また、コミュニティ・スクールなどにより地域が積極的に学校運営に関わり、学校が地域コミュニティの拠点となっていくことで、学校全体で認め合い、助け合い、支え合う共生社会の実現を図っていくという軸を持っていきたいと考えている。この二方向の軸を持った学校として地域に貢献する教育活動を展開していきたいと考えている。

### (3) 主な質疑応答

**質 疑** 共生社会の実現に向け、センター的機能を発揮し、地域の各学校における支援を必要とする児童・生徒等への教育的ニーズに応じた効果的な支援を行うとのことだが、具体的にどのようなことに取り組んでいるのか伺いたい。

応 答 校内には様々な障害を持つ子供たちがおり、児童・生徒の支援、保護者向けの相談業務などを行っている。加えて、地域の小、中、高校の支援を行うということで、本校の教育相談コーディネーターが近隣の学校を巡回し、様々な相談に応じている。これは始まってまだ半年ほどだが、既に相談件数が校内で31件、校外は小学校7件、中学校1件、その他が2件、合わせて10件となっており、保護者、学校の教員からの様々な相談に対し、本校の教員が出向いて支援を行っている。

質 疑 新型コロナウイルス感染症が広まったことで計画どおりに進まなかったものはあるか。

応 答 令和2年4、5月は臨時休業もあり、実際の活動がほぼできない状況であった。6月の再開以降、各学校に手紙やメールで連絡を取り合い、小中学校が受入れ可能となつてから、担当が訪問させていただき、少しずつ始めていったところである。

質 疑 基本的な確認であるが、製パン室、プール、冷暖房完備の体育館などすばらしい施設であったが、建築費用は幾らぐらいか。

また、校名は普通、養護学校、その後名前が変わって特別支援学校となることが多いと思うが、当校は支援学校と特別が省かれていて珍しいと思った。何か由来、思いなどがあれば確認させてほしい。

応 答 建築費用については、概ね48億円である。

また、校名は県立相模原中央支援学校以降、県立横浜ひなたやま支援学校、県立えびな支援学校、県立あおば支援学校については、支援学校という名称をつけさせていただいている。養護学校、支援学校はいずれも特別支援学校という学校種となっており、その中で、神奈川県は支援教育という形で教育を進めてきたので、それをより一層推進するという意味合いも込め、特別支援学校の法制度の改正に伴いながら、支援学校という校種名にしてきている。

質 疑 特徴として、いわゆる知肢併置であると思うが、例えば、県内調査資料に書かれていた防災計画なども、知的の方と肢体不自由の方だとそれぞれ指導方法も違うと思う。先ほど話が出た新型コロナウイルス感染症対策もそれぞれの部門で御苦労があるのではないかと思うが、その辺りはどのような工夫をされているか。

応 答 まず、防災については、それぞれ知的部門と肢体不自由部門で配慮すべき事項が違う。特に、肢体不自由部門は車椅子で生活している児童・生徒が多いので、生活エリアを1階部分とし、例えば、火災などの災害時には屋外に避難しやすいようにしている。2階、3階で生活することもあるので、屋内でもスロープの設置、屋外階段も設置する

などの対策をとってきている。

知的部門についても、特に他の学校と差はないが、屋外階段等を使って避難経路を確保できるようにしている。

青葉消防署が近くにあるので、消防署と連携して、避難訓練等を行っている。最近の避難方法として、株式会社京都アニメーションでの火災事故等を受け、水平避難ということで、いきなり外に逃げるのではなく、同じ階で一定程度安全な場所に逃げながら、そこで救助を待つという避難方法をとっているため、2階、3階にいる知的部門の生徒たちもスムーズに避難できるような対策をしている。

新型コロナウイルス感染症対策については、国、県のガイドラインを受け、本校独自のガイドラインをつくり、その時々への感染状況に応じた対策をとっている。特に肢体不自由部門については基礎疾患を持っている児童・生徒もいるので、生活環境の中で、日々用いる用具などの消毒作業、衛生管理をしっかりと行うことにより、教員自身の場合によっては、児童・生徒が変わるごとに衣服を替えるなどといったところまで配慮して指導に当たっているところである。

**質 疑** 今後の活動として、地域との協働があると思う。現状コロナ禍でなかなか動いていないとは思いますが、今後始まるものや取組があれば伺いたい。

**応 答** 徐々に活動を始めている。高等部は活発に動き始めており、周辺の高校や機関との交流を始めている。小中学部についてもなるべく地域に出ていこうということで、近隣の公園など出ていけるところから行きはじめ、実際に児童・生徒が出ていく前に教員が色々な場所に出向いて行って、活動可能な場所を探索しながら、今後の交流に持っていきたいと思っている。

具体的には、高等部は社会体験実習ということで、株式会社ユニクロや東京靴流通センター、各協会、図書館といったところで2、3日間実習をさせていただくことなどが始まっている。

**質 疑** 児童・生徒の状況については、同じ小学部でも学年が複数で一学級という編制になっている。このような学級編制で学習上の問題はないのか。さらに、学級自体の定数の考え方を確認したい。

もう一点、新校を開設したということで、転入者が多く、広範な地域から通っており、スクールバスも6台あるということだが、スクールバス利用の最長の所要時間はどの程度になっているか確認したい。

**応 答** 学級については、公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律の定数に基づいて編制されるもので、例えば、商学

部の聴覚障害学級の1、2年生が複式の学級になっている。法では、基本、一クラスの定員が3人となっているが、学年に一人しかいない場合は複式を組むというルールになっているので、法に基づきこのようになっている。

学習内容については、3人という人数でも、それぞれ学年での学習内容があるが、特に特別支援学校の場合は個々に応じた教材を用意して、教員一人一人、違う内容での学習を行っているので、複式にした場合でも学習への配慮はできているのではないかと考えている。

スクールバスの最長乗車時間については、学校から56分である。

**質 疑** スクールバスの乗車人数65人については、行きに通学してくる数だと思うが、帰宅の場合、今日もそうであったが、迎えの車が大部分多くあったが、差はどのくらいになっているのか伺いたい。

**応 答** 現状、下校時はここ数日間30名程度の乗車である。元々65名の利用であるので、その半分程度は放課後等デイサービス事業所の迎えや保護者の自家用車の迎えを利用しているという状況である。

**質 疑** 他の会派からも質問があったが、支援学校という名称について、支援学校がベストな名称であれば、既存の養護学校も名称を変えるほうがよいと思うし、養護学校という名称の必要性があれば残す必要があると思うが、名称についてはどのように整理されているのか。

もう一つ、校門を出たところの交差点の信号機に中里学園前と表示がある。生徒からしてみればあまり気持ちのよいものではないと思うが、いつ直されるつもりか。

**応 答** 信号機の名称については、開校前から青葉警察署に相談をさせていただいている。中里学園前と中里学園入口という信号機があるが、地域の方の御理解もいただきながらということで、自治会にお話をさせていただき、学校の前については、あおば支援学校前、中里学園入口については、地名をつけるということで、恐らく中鉄町になると伺っている。当初、警察署からは令和2年8月頃までには変えるという話であったが、順次行っているということなので、できれば令和2年度内ぐらいには変えていただきたいと話をしているところである。

支援学校という名称については、令和2年3月の神奈川県の特例支援教育のあり方に関する検討会の報告書において、一つの課題として提起されている。この報告を受け、今、局内、各学校で検討を始めたところなので、考え方、方向性を今後整理していく。

(※ 上記以外の質疑については、視察中に随時行われた。)



#### (4) 調査結果

県立あおば支援学校では、基本理念（コンセプト）、使命（ミッション）及び学校の取組の方向性を示した二つの軸の下、一人一人の児童・生徒に合ったきめ細やかな指導、学校運営が行われていた。また、新設された校舎は、児童・生徒が利用しやすいよう、校舎内の色分けや、手すりの上下で太さが変わっていること、災害時の水平避難などが考慮されるとともに、可動式の壁によりプレイホールを教室に利用転換できるなど、随所に工夫がされていた。

以上のように、県立あおば支援学校を調査したことにより、本県教育委員会の今後の施策を審査する上で、参考に資することができた。

〈参 考〉

1 随 行 者 結 束 主 任 主 事（議 会 局 議 事 課）、若 月 副 主 幹（教 育 局 総 務 室）

2 調 査 箇 所 側 出 席 者

県 立 あ お ば 支 援 学 校

田 代 教 育 局 長、篠 田 教 育 局 総 務 室 長、宮 村 支 援 部 長、萩 庭 特 別 支 援 教 育 課 長、  
横 澤 あ お ば 支 援 学 校 長、星 野 副 校 長、羽 賀 教 頭、大 塚 統 括 教 諭、山 本 統 括 教 諭